

ここに鉄橋があったのだ 古い地図が見せてくれた軍用鉄道の軌跡

平成 4, 5 年頃からだろうか、「下総の三角点探し」と名付けて身の回りに存在する三角点を自分の目で確認して見ようと思って、近場の散策を始めた。国土地理院の 25,000 分の一の地形図を片手に、ある時は車を使い、ある時はマウンテンバイクを使い、またある時は自宅から歩いてなど、様々な形態で探索に挑んだ。

小さな神社の境内の端っこの方にあった三角点、田圃の真中の農道の傍らにあった三角点、学校の敷地の中にあった三角点、高速道路の法面にあった三角点などなど様々な三角点を発見することができて楽しい。時には不思議な石仏や石塔に出会ったりしたことから、「この道は昔はどんなだったのだろう？」という興味が湧いて、脇道にそれることも少なくなかった。そんな時には、我が家から徒歩 5 分ほどのところにある市立の図書館が役に立った。

何度か図書館の世話になる内に、東京・千葉・神奈川の要所の明治・大正・昭和の国土地理院の地形図を集めた分厚い本を発見した。この本の中から、千葉県の何ヵ所かの区域の昭和と大正の二時代の地図を見つけたので、我が町の周辺が載っている何ページかを選んでコピーして持ち帰った。地図は 10,000 分の一の「三角原」（大正 6 年 10 月版及び昭和 7 年 2 月版）と「六方野原」（大正 7 年 2 月版及び昭和 7 年 2 月版）。同じエリアを表している最新版の 25,000 分の一の地形図「習志野」とを並べて見くらべる日々が始まった。

大正・昭和・平成の三時代の地図を入念に見比べている内に不思議なものが目に止まった。大正 6 年には針葉樹林が広がる下総の大原野だったところに、昭和 7 年には「軍用鉄道」と書かれた一本の軌道が出現している。コピーしてきた古い地図の上に現在の主要道路や施設を書き入れて見た。我が町（こてはし台団地）の北端を走るバス道路は軍用鉄道の軌道の跡だということがわかった。鉄道連隊がある千葉駅から来た線路は北西に向かって走り習志野の陸軍の施設に向かう。演習線路習志野線と名がついているが、時代が移り変わると軍用鉄道と名を変える。この線路のほぼ中間地点の「犢橋（こてはし）」駅を過ぎたあたりから真北に上がる軍用鉄道と書かれた線を分ける。北に向かう

線は、のちに柏井浄水場となる原野を横切り花見川を渡る。その後大回りして南に向かい元の本線に合流する。何ゆえに北上迂回する経路が必要だったのかはわからない。（右図）
どこかに鉄道の痕跡を残すものがないだろうかと思い、地図を片手にその道を辿って見る散策が始まった。バス通り、雑木林の中、民家の裏手等々を探してみたが、さしたる収穫もなく時だけが去って行った。



冬の午後、日当たりが良くて温かい場所を求めて花見川の散策に出かけて見た。花見川は、現在の千葉市と八千代市の境界の低い分水嶺を起点として東京湾に注ぐ川だった。分水嶺の反対側には印旛沼に注ぐ小さな流れがあったが、しばしば発生する印旛沼の溢水に悩んでいた。

この対策として、江戸時代中期に分水嶺を人工的に開削して北行の流れと南行の流れを結び、印旛沼の水を東京湾へ流す「落とし水」の経路を確保する工事が始められた。現在ではその中間地点に調整機能を持つ大和田機場も設けられ、印旛沼から出た水は新川の流れとなり、花見川と名を変えて東京湾へと注ぐようになっている。

昭和7年版の地形図では軍用鉄道がこの花見川を渡っているが、現在は弁天橋から柏井橋までの2Km余の間は橋がない。横戸台団地の一番奥で行き止まりになっているバス通り、軍用鉄道の為に架けられた鉄橋はどこへ行ってしまったのだろうか？どこかに鉄道の痕跡が残ってはいないだろうか？

手始めに我が家から近い左岸の探索を開始することにしたが、夏場は藪が深く立ち入ることはできないため本格的な探索は秋になってからということにした。

ある日、日だまりを選んで土手に腰を下して地図を片手にひと休みしていたら・・・。

対岸の藪の形が気になった。篠竹や枯れ枝や蔓に覆われたひと固まりが、どことなく直方体をしているように見える。(写真：右)



藪が枯れるのを待って、双眼鏡を持って再び探索に行ってみると、切れ落ちた蔓の間にコンクリートの四角い塊が姿を現していた。(写真：左)

ポイントを充分に頭に入れた上で、マウンテンバイクを走らせて対岸へ急行。柏井高校の裏に回って、鷹の台カントリークラブの縁を藪こぎして、はやる気持ちを押しさえながら川の右岸に辿り着いたら・・・。朽ちたコンクリートの塊が、「これが生きた歴史年表だぜ！」と言わんばかりに陽光を浴びていた。(写真：下)

この上に鉄骨の橋梁が乗り、向こう岸との間をつないでいたのだと思うとこの裏さびれたコンクリートの塊が生きているような気がした。コンクリートの上に立って左岸の景色を眺め直して見たが、造成し直したようなきれいな草地の斜面が見えるだけで対岸には橋脚らしきものは何も見当たらない。



この鉄橋を渡る軍用鉄道は、千葉と習志野の陸軍鉄道連隊の間を結んでいた。大正6,7年の地形図には何も存在せず、昭和7年の地形図に示された「軍用鉄道」。

明治維新による「富国強兵・殖産興業」の政策、習志野原は陸軍の演習場になった。それまでは小金牧と呼ばれる馬の放牧が行われる大原野だった。演習場や軍用の施設類は南東に広がり、千葉市の幕張・検見川・稲毛方面や四街道方面にまでいたる広大なもので、昭和7年版の地形図には「警戒標」「監的」「展望観測所」などが数多く表記されている。

陸軍少将篠原国幹の指揮の下で行われた大演習に立ち合った明治天皇のお褒めの言葉「篠原に習え！」が変形して「習志野」という地名が生まれたという経緯を書物で読んだことがある。我が国の「戦争の歴史」への端緒となったのがこの辺りだったのだと考えると不思議な気分である。

団地の中を走るバス通りも、鉄道が横切っていたと思われる浄水場も、稲毛に向かう長い一本道も皆「歴史」を背負った生き物だった。

以上

◆花見川・習志野原今昔混合地図



<後日譚>

20年余りに胸をときめかせて歩き回って、こんなことを調べて楽しんだことを思い出した。今やインターネットの時代、ネットワーク上の随所にこのような報告が掲載されており、パソコンの前に座ればこの程度のことはおろか、それ以上のことまでがすぐに判ってしまう。しかし、自分で気がつき、自分で汗をかいて確かめて見ることに意味があったと思っている。